活動・交流・産業
SAKAIWA

創造

文化活動がとても盛んな坂井輪地区。音楽や芸術はもとより、地域学や日本舞踊など地域の特色を盛り込んだ活動が根づいています。

その中で、西新潟市民会館を拠点に文化活動を展開しているのが「文化村さかいわ」です。6月7日から16日まで同館などを会場に5周年記念展が行われました。

風をテーマに日本画、版画、洋画、書道、彫刻、工芸の専門家たちの作品を展示した美術展や作品について作家と語り合う会、記念コンサートが同館で開かれたほか、「街をアートでいっぱいにしよう」と大堀幹線沿いの協賛店34軒の店頭にアマチュアの人たちの絵画を展示し、道行く人たちの目を楽しませてくれました。

5周年記念展で大堀幹線に展示された絵画

協賛店のひとつ、キッチン丘を経営する渡辺丘さん（小針2）は、「絵画の店頭展示は大堀独自のとてもいいアイディアだと思います。事務局の人たちのがんばりを見ていると、何か協力したいという気になるんですよ」と話します。

文化村さかいわは、坂井輪地区の文化を支え、優れた美術作品を通して心豊かなまちづくりに貢献していこうと、地域在住の芸術家・文化人が中心となり平成10年に旗揚げをしました。

「今回をステップにますます地域に根ざした活動を続け、固定概念にとらわれない展覧会を、いろいろな人たちと企画していきたい。特に若い作家の人たちにどんどん参加してもらいたいです」と文化村さかいわ実行委員会代表の市橋哲夫（画家）さんは熱意を語りました。

愛護

西川をきれいにする会の呼びかけのもと、7月28日に「西川堤1000人のクリーン作戦」が実施され、西川沿いの周辺住民約300人が参加しました。

1時間にわたり平島橋から新西川橋までの約9を清掃。空き缶などのごみ510を回収しました。

同会は発足して16年目。これまでにもニシキゴイの放流、西川を考える勉強会などの活動を続けています。

同会実行委員長代行の遠藤義夫さんは「年々ごみの回収量は減ってきている。地域住民の協力のたまものですね」と活動が実ってきたと話します。

坂井輪地区は、このように愛護活動が盛んで、ほかにも、西川緑地愛護会による西川緑地での桜の育樹活動と美化活動、一番堀をきれいにする会による堀の両岸の除草や花の植栽活動が行われています。

また、平島1丁目自治会は、平島公園での清掃・除草など長年にわたる公園美化活動が認められ、4月に国土交通大臣から表彰を受けています。

西川堤防のクリーン作戦

祭り

「どんつき祭」「有明福祉タウン・夏まつり」「ふれあい坂井輪まつり」など、たくさんの人に楽しんでもらおうと、地域の皆さんの企画・運営による手作りの祭りが行われています。

絶好の海水浴日和となった7月27日には、青山海岸のゆうやけこばり周辺の浜辺を会場に、どんつき祭が実施されました。

ビーチフラッグ大会やダンス、コンサートなどのイベントのほか、夜には花火大会が行われ、クレーン車2台を使ったナイアガラの滝に点火されると、見物客から大きな歓声が上がりました。

今年で15回目を迎えたどんつき祭

主催者の一番会幹事長の庭山英俊さんは「早いもので今年で15回目となりました。今回も多くの市民に楽しんでもらえたと思います」と疲れも見せずに話していました。

有明福祉タウン・夏まつり
日時　8月24日午後3時半～7時
会場　有明福祉タウン
問い合わせ　市有明福祉事業協会（231・3082）へ

ふれあい坂井輪まつり
※本紙5面下段に掲載

協力

市では、家庭でできる身近な雨水対策のひとつとして、屋根に降った雨水を下水に流さず、地中に埋めたますを通して地下に浸透させる「雨水浸透ます」の設置に対し助成をしています。7月末現在の設置数は全市で2万654基。そのうち坂井輪地区での設置数は4608基と市内ではトップとなっています。

その原動力となっているのが、市雨水流出抑制普及協力員の八木稔さん（寺尾上4）。「設置してみて、その効果に気付き、一軒一軒回り設置を勧めました。1500軒くらいは訪ねたと思います」と話すように、周辺の住民はもとより広範囲にわたり設置を呼びかけています。

坂井輪地区は、平成10年の8・4水害で大きな被害を受けました。市では抜本的な対策を講じるため、小新ポンプ場の建設や坂井輪雨水幹線の整備などの雨水排除改善事業を、国、県と連携を取りながら進めています。

農業

小新ICから新通ICまでのバイパス沿いに広がる広大な水田地帯。新興住宅地という印象が強い坂井輪地区ですが、米を中心に季節ごとの野菜や果物など数多くの農産物が生産されています。

「この地区で農協に登録のある農家は450軒ほど。野菜などを出荷している農家の多くはスーパーなどとの契約農家です」と話すのは、JA新潟西坂井輪支店営農経済課長の榊原さん。関屋カボチャや青山ネギといった、新潟の伝統野菜を作っている農家もあるそうです。

炎天下のナス畑でナスの選定をしている農家の主婦は「いろいろな野菜を作っているが、そのほとんどは自給自足。ほしいという人があれば分けてやり、余れば親戚や知人に配っている」と現状を語ります。

「米価は下がり、農業経営は一段と厳しくなっている上に、後継もいない。でも、花が開き実がなるころになると、うれしくなりますね」と炎天下もどこ吹く風と笑顔で話していました。

炎天下の中での農作業

村落の形成は江戸時代以降

坂井輪地区の村落は、江戸時代に入ってから開発されました。地区を貫流する西川は、重要な交通路の役割を果たしていました。

亀貝や小新から黒埼にかけての地域は、西蒲原郡で最も低い場所で、洪水が多く発生するところでした。新川の開削によって多くの潟が干上がりましたが、明治の終わりになっても水田化できない湿地も多く、地区の排水は大きな問題となって残りました。

一方、砂丘部にある村では飛砂の害がひどく、村によっては砂防林の造成に乗り出していました。

坂井輪地区は、砂丘部に松林や畑、平地には水田が広がる地域でしたが、昭和29年11月1日、新潟市との合併を契機に大きく変わりました。

30年代ころから砂丘部を中心に市街地化が始まり、39年の新潟地震後は、被災した人たちが郊外に住宅を求めたことや、自家用車の普及により、急速に世帯・人口が増加しました。

公共施設やショッピングセンターなどの施設整備が進み、59年には物流の中心となる流通センターが完成。流通センターの拡張に伴い、平成元年に的場遺跡が発掘され、4年には市指定史跡に、6年には県指定史跡となりました。

平成に入ると、交通網の整備が進み、元年に国道116号新潟西バイパスの黒埼～小新間、2年に小新～亀貝間、7年には亀貝～高山間、10年には高山～曽和間が開通しました。

7年には坂井輪連絡所が地区事務所として開所。宅地化はさらに進んでおり、小新梅田、小新白鳥、新通の3カ所で現在、土地区画整理事業が行われています。

この地区には、本市の人口の約6分の1に相当する、9万余りが住んでいます。

旧小市橋付近の西川（昭和58年）